

第 1 回懇談会で各委員から提起された主な論点について

- * 本資料は第 1 回懇談会における御意見を事務局で整理したものであるが、同一のテーマについての複数の委員の御意見を適宜まとめて記載している部分がある。
- * 第 1 回懇談会において、時宜に合わなくなっている「高齢者」という言葉を用いるのは止めるべきではないかとの御意見をいただいたところであるが、現時点でこれに代わる適切な呼称が見出せないため、本資料では「高齢者」の語を用いている。

1. 総論

- 「人生 85 年時代」というテーマ設定はチャレンジングな発想であり、高く評価できるのではないかと。
- 急速な高齢化が進む中で、我が国経済社会の活力を保ち、誰もが長寿化を喜べるようにしていくため、高齢者の高い就労意欲を活かし、「少なくとも 65 歳まで働くのが原則」という雇用システムをより確かなものとするべきではないかと。
雇用の分野においてエイジフリーは世界的な潮流であり、日本もその方向に向かわざるを得ないが、日本の年功序列的な社会意識とどのように調整していくかが課題ではないかと。
また、高齢期になってからレジャーや学問等を楽しめるようにするためには、若い頃から元気に過ごしていくことが大切であり、そうした面でのサポートも重要ではないかと。
- 人生 50 年とか 60 年の枠組みの下で凝縮して生き急ぐのではなく、「人生 85 年時代」に向けて、少し密度を薄くし、ゆったりと人生を送る方向性が望ましいのではないかと。
産業界が消費者のニーズに応えようとするあまり、24 時間営業のコンビニエンスストアや宅配便に典型的にあらわれているように労働者の負担が過重なものになっている面もあるのではないかと。こうした社会全体の在り方の見直しが重要な課題ではないかと。

- 人生が長くなるのに伴って自らの人生設計を一人一人が主体的に描いていくことが求められるものの、我が国では社会全体に「組織頼み」や「国頼み」の風潮が根強い。個々人がより自立する方向での意識改革が必要ではないか。そうした意識改革がワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）の実践にもつながるのではないか。
- 個々人が、より自立した生き方をするためには、例えば社会人が大学・大学院で学び直した後に職場に復帰するといったことを行いやすくするため、企業や学校等を出入り自由なものにするなどの環境を整備し、社会的なモビリティが失われないようにしていくことが必要ではないか。その意味で長期休暇制度の普及促進は有意義ではないか。
- 日本は、諸外国と比較すると、誰でも学校に行くことができ、交通網も整備され、治安も良く、福祉も進んでいるなど優れた点があり、また国民の満足度も比較的高いので、必ずしも過度に悲観的になる必要はないのではないか。良いところをもっと伸ばし、国民の満足度を高めるにはどうしたら良いのかといった観点に立って議論すべきではないか。
- 一方、食糧やエネルギーの自給、安全保障等の面で将来についての不安感や閉塞感があるが、その中でも経済的な格差の一定水準以上の拡大や固定化は大きな問題であり、その防止に向けて公教育の充実等に取り組んでいくことが必要ではないか。
- 少子化対策として、子どもを増やそうというのは国民感情にもそぐわないし、相当無理のあることなのではないか。それよりも人口 6,000 万人くらいの規模に軟着陸し、「老人大国」を目指してはどうか。
- 多くの人は死までの一定期間、食事、排泄、入浴など普通に生きるための基本的日常生活を、他者の手に委ねることになるが、この時期に適切な、医療、看護、介護、特に十分な介護がなければ、人間としての尊厳や自律が危機に瀕する。
人生 85 年になろうが、90 年になろうが、老いと死が必然である以上、人生の最終章に直面する、人間としての尊厳や自律の危機に対して、社会として、あるいは国家として十二分な緩和ケアの提供を保障することが必要。（書面でいただいた御意見）

- 人は言葉に縛られるので、既成概念にとらわれずに「人生85年時代」を考えるためには、「高齢者」など今まで用いてきた言葉や表現の問題点について十分注意を払う必要がある。

2. 各論

I いきいき人生のための基礎づくり

- スポーツは世代を超えたコミュニケーションを伴うものであり、また、人生を楽しむには元気な身体が必要である。スポーツを通じて、世代を超えた健康・教育・生きがい・コミュニケーションが実現されるよう、スポーツの一層の浸透に向けた環境づくりが重要であり、是非関係者の連携を強化する方向で進めて欲しい。

また、高齢者のスポーツへの参加を促進するために、マスターズやねんりんピックといった取組はとても有意義ではないか。

- 肥満人口の増加は食生活の変化に伴う世界的な趨勢。日本は、今ならまだ対策が打てるので、肥満人口を減らすための取組が重要ではないか。

- 誰もが社会参画しながらお互いに支え合える社会を実現していくためには、社会保障の充実による安心できる社会の構築が重要ではないか。

- フランスの人々のように早期にリタイヤして楽しみながら老後を過ごそうと思うなら、年金制度の充実が必要と考えられる。フランス人などヨーロッパ人は遊びが上手だが、文化の違う日本人がそのままマネをするのは難しいのではないか。

他方、地方の伝統的な踊りなどを見ても、日本人は自分なりの楽しみ方や幸せを見つける力を持っていると言えるのではないか。

II 自己実現に向けた働き方の改革

- 「現役とリタイヤ」、「仕事と休暇」のように人間の生活を二分法で分ける考え方を変える必要があるのではないか。仕事と余暇の中間の時間にこそ観劇、音楽会等の文化的活動がある。半ばプライベート、半ばパブリックな時間・空間を大切にすることを考えてはどうか。江戸時代もパブリックとプライベートの間で文化活動や社会奉仕を行っていたのではないか。

- 高齢者になって、長年やってきた仕事を辞めて急に新しいことをするのは難しい。若いうちから新しい技術を習得する必要があるのではないか。そのための手法として「ジョブシェア」を検討してはどうか。
- ワーク・ライフ・バランスや長期休暇制度の導入が、リフレッシュや自分の幅を広げた入りするためには大事なのではないか。
- アイディア勝負のビジネスが増えたため、単に長時間労働をすれば生産性が上がるというものではなくなっている。労働生産性を上げるためには仕事以外の時間で様々なアイディアを生み出すためのインプットを行うことが重要。この意味でもワーク・ライフ・バランスが大事。
また、団塊ジュニア世代には出産・育児だけでなく、介護と仕事との両立を余儀なくされる人がたくさん生じると予想され、人材確保という面で企業にとってもワーク・ライフ・バランスの実現は大事な課題ではないか。
- 江戸時代は雇用者はほとんどおらず、自分の意思で引退を決める自営業者が中心であったため、団塊の世代の斉退職などの問題は生じない社会であった。長生きは個人の問題であり、高齢化が社会問題化するようなこともなかった。
江戸時代と現代では社会の基本的な枠組が全く異なっているところであるが、敢えて比べるなら現代は雇用者（サラリーマン）化が大変進んでおり、こうした中で自営業の価値を見直すことが必要ではないか。

Ⅲ 地域・社会参加によるいきいき人生の実現

- 個人の自己実現や「いきいき人生」のためには、他者からの承認や尊敬（リスペクト）が不可欠であるため、一人で活動するだけでは不十分であり、地域のつながり、コミュニティが必要なのではないか。
同時に一定年齢になったときにコミュニティで有意義な活動を行うためには、その数年前からコミュニティで人間関係を作っていくことが必要であり、そうした準備期間を確保していくことも必要ではないか。
- 産業の活性化や創業しやすい社会の実現のために、今後とも規制緩和を推進していくことが重要。「1円起業」が可能になったことは評価できる。
- 日本では都会と地方の違いが大きく、都会の話が地方では当てはまらないことも多いので留意が必要。